



真ク・リトル・リトル神話大系 8

Occult Lovecraft

H. P. Lovecraft : Four Decades of Criticism

S・T・ヨシ アンソニー・レイヴン 編

国書刊行会

真ク・リトル・リトル神話大系

第8巻

昭和59年1月21日印刷

昭和59年1月31日第1刷発行

2,900円——定価

セイユウ写真印刷株式会社——印刷

大口製本印刷株式会社——製本

落丁本・乱丁本はおとりかえます

著者——H・P・ラヴクラフト 他

編集——S.T.ヨシ

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨3-5-18 郵便番号170

電話 03-917-8287 振替東京5-65209

目次

Contents

ラヴクラフトにおけるプロヴィデンス	B・L・セント・アーマンド	7
『白い帆船』——心理学的オデュッセイ	ダーク・W・モジック	45
ラヴクラフトと小説における宇宙的特質	R・L・ティルニイ	55
ユートピアとしてのラヴクラフト管見	ポール・ブル	65
詩人としてのラヴクラフト管見	W・T・スコット	95
ラヴクラフト的悪夢	R・ボーレム	107
『ユゴス星より』の連続性	R・ボーレム	117
ハワード・フィリップス・ラヴクラフト頌	C・A・スミス	123
宇宙と宗教	H・P・ラヴクラフト	127
牧神は死なず	アンソニー・レイヴン	137
レッド・フック街のH・ラヴクラフト	F・B・ロング	145
レッド・フック街の呪文	H・P・ラヴクラフト	151
ラヴクラフトと黒魔術	アンソニー・レイヴン	161
金とおがくず	サミュエル・ラヴマン	175
『アウトサイダー』の四つの顔	ダーク・W・モジック	181
H・P・ラヴクラフトと擬似数学	R・ワインバーク	215
ク・リトル・リトル神話の起源	ジョージ・ウィットセル	223
ラヴクラフトと女性たち	ベン・P・インディック	243
わが小説作法	H・P・ラヴクラフト	253
『批評の四十年』日本語版へのあとがき	S・T・エシ	265
解説——宮壁定雄		269
附録・The Uncanny World of H.P.L.		281
資料編ラヴクラフト研究資料リスト		1

Facts in the Case of H. P. Lovecraft by <i>B. L. St Armand</i>	7
"The White Ship": A Psychological Odyssey by <i>D. W. Morig</i>	45
Lovecraft and the Cosmic Quality in Fiction by <i>R. L. Tierney</i>	55
Dystopia as Utopia by <i>Paul Buhle</i>	65
A Parenthesis on Lovecraft as Poet by <i>W. T. Scott</i>	95
A Lovecraftian Nightmare by <i>R. Borem</i>	107
The Continuity of the Fungi from Yuggoth by <i>R. Borem</i>	117
To Howard Phillips Lovecraft by <i>C. A. Smith</i>	123
The Cosmos and Religion by <i>H. P. Lovecraft</i>	127
The Horned God Lives On ! by <i>Anthony Raven</i>	137
H. P. L. in Red Hook by <i>F. B. Long</i>	145
The Incantations From Red Hook by <i>H. P. Lovecraft</i>	151
Lovecraft and Black Magic by <i>Anthony Raven</i>	161
Of Gold and Sawdust by <i>Samuel Loreman</i>	175
The Four Faces of the Outsider by <i>D. W. Morig</i>	181
H. P. Lovecraft and Pseudomathematics by <i>R. Weinberg</i>	215
Genesis of the Cthulhu Mythos by <i>Georg Wetzl</i>	223
Lovecraft's Ladies by <i>Ben. P. Indick</i>	243
Story-Wrighting: A Letter from H. P. L. by <i>H. P. Lovecraft</i>	253

本文イラストレーション——楯 喜八
ブックデザイン——神田昭夫

To
ANTHONY TOVATT
PETER GOODELL
and
ROBERT C. ROSE

日本語版翻訳権独占
国書刊行会

© 1984 Kokusho-Kankohkai

The Occult Lovecraft

edited by

Gerry de la Ree

Copyright © 1975 by

Gerry de la Ree

First published 1984 in Japan by

Kokusho-Kankohkai

Japanese translation rights arranged

with Gerry de la Ree

through The English Agency (Japan) Ltd.

ラヴクラフトにおけるプロヴィデンス

Facts in the Case of H. P. Lovecraft

バートン・L・セント・アーマンド 福岡洋一 訳



ヘニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー」一九七〇年五月十七日号に載った小さな記事に関心を寄せた読者の顔ぶれは、きつといっぶう変わった組合せだったのであろう。マーク・スローニムの「ヨロップ・ノート」で「リバイバル」と見出しの付いたなかに、アメリカ人読者向けにこんな記事が出ていたのである。

フランス、イタリア、およびスペインで非常に顕著なのは、アメリカのサイエンス・フィクション作家、H・P・ラヴクラフトの翻訳（ほとんどは良訳）¹点数の増大である。それも、ただパリやローマやマドリッドで広く読まれているというだけでなく、指導的な立場にいる批評家たちから、ポーにも優るといふ賛辞を得てもいる。つい先頃、スペインのエッセイスト、ホセ・ルイス・ガルシアは、ラヴクラフトを世界でもっともすぐれた作家十人のひとりに数えているし、²フランスの洗練された雑誌 *L'Herminette* は、このアメリカ最高の超自然的文学の大家に捧げる特大号を出した。

恐らくほとんどの読者は何のことやらよくわからず、興味を惹かれることもないままページを繰ったにちがいない。そもそもH・P・ラヴクラフトの名前など聞いたこともないし、いずれにしてもこういった外国での「発見」などというものを大仰に騒ぎたてること自体、どうも胡散臭く思えただろう。それでも私のいう「いっぶう変わった顔ぶれ」の読者にとっては、この短い記事が実に刺激的なニュースであり、途方もなく大きな意味を持った「変化の兆し」であったはずである。ほんの一握りのそういう貴重な人たちをさらに分類するとすれば、大きくつぎの三つのグループに分けられるだろう。第一に、しっかりした鑑賞能力のある眼の肥えた作家や批評家たち。第二に、単純素朴で、いささか狂信的ですらあるサイエンス・フィクションの蒐集家および「ファン」たち——ほとんどはハイ・スクールやカレッジの学生であ

る。そして第三に、ロード・アイランドの歴史、とくにこの土地の伝統や承譜、また政治的、文化的な側面から見た歴史に尽きせぬ興味を覚える人たち。

ラヴクラフトが今ごろになってヨーロッパでもはやされるようになった理由や、そうした文学的評価の高まりに対する反応が、いまあげた三つのグループになぜ共通して現われるかを説明するのに比べれば、《H・P・ラヴクラフトとは誰か?》という質問に答えるほうがずっとたやすいことだ。そこで私はまず、まだ熱狂的なファンというわけではない人のために、できるだけこの設問に答えておきたい。つまり、^{ラヴクラフト文獻}「ブラウン大学のジョン・ヘイ図書館に保管されている文書のみならず、稀覯本目録のなかに最近目につくようになった、ラヴクラフト自身の印が押してあって驚くほど高い値段のついたものをもひっくるめてという、無意味とは言えないがいささか大仰な呼称に合わせれば、^{ラヴクラフトイマニエ}「ラヴクラフト狂」とも呼ぶべき人々の未だ埒外に置かれている人たちのためである。ただし伝記から明らかとなるのは、この「アメリカ最高の超自然的文学の大家」の生活が、知的な面では魅力的ながら、現実面では退屈なものだったということではない。

ハワード・フィリップス・ラヴクラフトは一八九〇年八月二十日、プロヴィデンスのエンジェル・ストリートにある祖父の大きな家で生まれた。まだ八歳のころ、父親がバトラー病院に入れられて梅毒で亡くなり、それ以後ハワードはこの祖父の家で、大人たちに溺愛されて成長した。ラヴクラフトには、天才児と言えそうな面もいくらかあった。父親の死ぬずっと以前から物語や詩を書き、科学の実験をしたりしていたのである。ところが過保護な母親はハワードが同じ年頃の子供たちと遊ぶのを好まず、「嫌な顔」だとか「恐ろしい顔」だとか言って貶してばかりいるものだから、仲間を求める気持ちをすっかり萎えさせてしまった。そこでまだ若いハワードは自分だけの夢想の世界を築きあげ、そこに神話に出てくる生き物

や遠い昔の種族を住まわせるようになり、それでも外面的には十八世紀ふうの懐疑的な態度を身につけて、人生も世界も機械的で何の面白味もなく、所詮は無意味なものと見なす退屈しきった傍観者としてふるまった。このほとんど生来のもとも見える懐疑的な人間観・世界観について、ラヴクラフト自身は後にこう書いている。

わたしが懐疑的なことばを初めてはっきりと口に出したのは、たぶん五歳の誕生日よりも前のことで、
《サンタクロース》の話は作り話だという、本当はもっと前から気づいていた事実を聞かされたときだったろう。このことがはっきりしてしまうと、《神さま》の話だってやっぱり話かもしれないじゃないかという疑問を抱かれないでいられなくなった。その後まもなく、わたしは由緒正しきフリースト・バプティスト・チャーチの日曜学校の「幼年組」に入れられ……まだわたしのなかに残っていたキリスト教的信仰のすべてを、ここできれいさっぱり棄て去ることになった。受け容れるよう求められた神についての話の莫迦莫迦しさと、マホメット教の東洋的な壮大さに比べていかにも暗く陰鬱な教義のせいで、わたしの懐疑論は決定的となり、やっかいな質問ばかりするようになったため、出席をやめることを認めてもらえた……。明らかにわたしは、ほかの「幼児たち」の単純な信仰の破壊者と目されていたのである。⁴

たしかに、当時のラヴクラフトの「幼児期の」行動ならどれをとってみても、「^{アッファイン・チリッフル}恐るべき子供たち」的なものだったらしい。わずかながら家族に遺された資産も、一九〇四年の祖父ウィップル・フィリップスの死とともに散逸してしまい、ラヴクラフトと母親はこれまでも見劣りのする住居に移らねばならな

くなった。ハワードはホープ・ハイ・スクールへの通学を続けようとしたが神経を病むことになり、母親のほうもじわじわ身体が「衰退」して、一九一九年にはやはりバトラー病院に入院、そして一九二一年に死亡した。それ以後のラヴクラフトは、独身でいたふたりの伯母と暮らし、自分の関心の向く方面は《アマチュア・プレス》活動に参加することでどうにか広げることができた。これは自分の作品を個人的に新聞の形で刷って交換する若い作家たちの集まりで、ここに自らの創作エネルギーの捌け口を見出したハワードは、その活動を通じてソニア・グリーンと出会い、自分より七つ年上のこの美しい未亡人と人生の新たなスタートを切ることを願って一九二四年に結婚した。ところがふたりのハネムーンは、ある怪奇小説の草稿をタイプするのに費やされ、しかも最初に仕上げたタイプ原稿をプロヴィデンス駅に置き忘れる始末だった。⁵ラヴクラフトのいわゆる「ニューヨーク流浪」のあいだは不運がしじゅうつきまとい、経済状態はますます悪化していった。

ブルックリンという自分の性分に合わない「バビロン」での生活を続ければ、気が狂うか自殺するしかなくなるだろうという意味のことを口にして、ラヴクラフトは一九二六年、ついにプロヴィデンスに向けて発った。結婚生活は文通という形で続けてはどうかと妻に言い残して。ふたたび伯母たちとの暮らしに戻ったハワードは、代作をしたり、ヘウィアード・テールズ誌（以下W Tと略す）のようなパルプ雑誌に自分の恐怖小説を売ったりして稼いだわずかばかりの収入で、細ぼそとながら節度ある生活に充足した日々を送った。それに十八世紀の英国紳士に同化しようとする態度も相変わらずで、北方人種の優越性を支持し、世界の愚事愚行をばんやり眺める傍観者をきめこんでいた。意気盛んな若手作家たちをニューヨークで得た文学仲間のサークルに加えながら、ラヴクラフトは一九三七年三月十五日に死亡するまで、読書と執筆のこの変わりばえのしない生活を漫然と続けたのである。ラヴクラフトの暮らした建物は、エン

ジェル・ストリート四五四番地の祖父の家以外はすべて、エンジェル・ストリート五九八番地のフラットや、バーンズ・ストリート十番地のアパート（ここに住む学生は最近ラヴクラフトの幽霊を目撃した⁶）も含め、現在も残っている。彼が最後に住んでいた十八世紀風の高台の家はプロスペクト・ストリート六五番地に移され、不吉そうな印象がひどく失われてしまったが、当時はカレッジ・ストリート六六番地、ジョン・ヘイ図書館のすぐ裏手にあった。とはいえ現在その場所にあるブラウン大学の美術棟も、大きな一枚岩を使い、いくらか振じれたような形の建物なので、ラヴクラフトの小説に出てくる「非ユークリッド的」「キュクロプス式の」建築物をそのまま取り出したようでもあり、不思議とそこにふさわしい記念碑となっている。

ラヴクラフトは、WT誌やヘアメージング・ストーリーズ誌全盛の、一九二〇年代の終わりから一九三〇年代初期のパルプ雑誌への寄稿以外ほとんど本を出していないという紛れもない事実にもかかわらず、セアラ・ヘレン・ホイットマンを除いて、いまでも注目に値するただひとりのプロヴィデンス生まれの作家とされている。さらに州の単位で見ても、エドウィン・オコナーとS・J・パールマンを別にすれば、やはりラヴクラフトがロード・アイランド州生まれのおそらくもっともすぐれた作家だということが明らかになる。私がここで言いたいのは、いまはもう忘れられてはいるものの、かつて *Jonny Cate Papers* の「ジェバード・トム」・ハザードによって有名になった、地方色を豊かに取り入れる伝統に、ラヴクラフトも自分なりにしたがつているということである。確かに現在ラヴクラフトは、地方史や文学史の専門家のみならず、もっとも意識の高い部分から低層部に至るまでの文学愛好家一般によってもよく読まれている。有名なアメリカ人批評家エドモンド・ウィルソンなどは、ガルシアがラヴクラフトをシェイクスピアやセルバンテスと対当に位置づけたのに反対して、ラヴクラフトについての自分の小論の題に「Tales of the

Marvellous and the Ridiculous²（「ラヴクラフト」^神）と付けたりしているが、これでもやはり問題を解決したことはない。—— いったいなぜ一九七〇年代にラヴクラフトが読まれるのか？

となればここでもういちど、ラヴクラフトの読者のうちの二つのグループに戻る必要がある。つまり先ほど後まわしにしておいた「意識の高い」読者と「俗っぽい」読者のことで、いずれも関心のありどころは作品の歴史的側面とは別であることには変わらない。ロウ・ブラウな読者のほうは、以前はほとんど十代の熱狂的なファンで、ホラー・ポルノグラフィからサイエンス・フィクションまで、パルプ雑誌に載るものならどんな小説にでも等しく興味を示すグループであった。かれらはラヴクラフト自身と同様、崩壊してゆく一九三〇年代の社会の「アウトサイダー」であり、パルプ小説のなかに、大恐慌さなかの小説以上に恐ろしい身のまわりの現実からの逃避の場を見出していた。

この逃避を完成させたのは《新しき戦慄》^{フリッピン・モズ}の世代で、体の奥底から揺さぶられるようなぞくぞくする昂奮を生み出すものは、宇宙からの侵入者だとか狼男の咬み傷だとか、あるいはそのほかのやはり同じような秘められた世界から現われる巨大な悪との遭遇であった。恐怖の根源がどこに置かれようと、ほとんど問題にはならなかった。フランクリン・ルーズヴェルトが国民に向かって言った言葉を引き合いに出せば、——それはこの種の小説とこの種の読者にうまくあてはまる公式でもあるが——「本当に恐れねばならないものはただひとつ、恐怖のみである」からだ。だが、ラヴクラフトはパルプ雑誌の衰退後も生き残り、疑いもなく総体に潤った比較的安全な時代である現在、どうやら世界的な「リバイバル」とも言うべき現象のただなかにあるようだ。しかしここにおいてもなお、《新しき戦慄》の公式は成り立つと私は考えている。

創造的な芸術家としての真の価値は、エドガー・アラン・ポーのそれにも似ていたため、ラヴクラフトは